

少しも可哀想ではない『テレーズ』に なぜか涙で顔がくしゃくしゃになった。

文 松岡和子



魚をさばく時の妙に生々しい音が印象的。

この映画を観ている最中から、そして観終わってからはなおさら、私はうろたえた。

泣けてくるのである。

と言って、涙で顔がくしゃくしゃになり、人に見られて恥しいからうろたえたのではない。我ながらなぜ泣けてくるのかさっぱり分からないから、うろたえたのである。

主人公のテレーズ（カトリーヌ・ムーシユ）は、まだ幼さの残る十五の歳でカルメル会修道院に入る。映画で描かれるのは、彼女が、ようやくのことで修道女としてカルメル会に入ることを許されるまでのいきさつ、修道院での日常生活、結核の発病、病床での日々、そして死——ただそれだけである。

では、うら若く美しい女性が、世の一般的な楽しみを何ひとつ知らないまま、若いみそで死んでしまうのが可哀想で

泣いたのか。

いや、そうではない。そもそもテレーズは少しも可哀想ではない。キリストの花嫁になることは、彼女の年来の望みであり、厳しい禁欲や苦業の生活をも、むしろ喜々として送っていたではないか。

では、健気で信仰篤いテレーズの、清く正しく簡素な生き方と、清くも正しくも簡素でもなく、俗っぽくてゴチャゴチャした我身の生き方との違いを突きつけられ、恥入って、深い悔い改めの涙を流したのか。

いや、それも違う。十九世紀末のフランスの聖女と、二十世紀末の東京であくせくしている己とは、しよせん住む世界が別だと割り切っている。第一、この映画を観ても、私はいささかも悔い改めてはいない。

では、感動したのか。

ひとことで言ってしまうばそういうこ

イリップ・ルーセロ）はそなえている。視点は大半の場面で見高さに固定されており、床に落ちたり、対象をアップで捉えたりすることはあっても、仰角はほとんど皆無。

修道院内の禁欲の生活と、装置を極限までぶき、視点を限った映像の禁欲、音の禁欲（いわゆるサウンド・トラック音楽は全く入らない。それだけに衣ずれや足音などが印象的に響く）とが見事に呼応している。

禁欲と言え、カルメル会は沈黙を重んじる宗派だそう、修道女たちが黙したまま思い思いの手仕事に励むシーンがある。だが、沈黙の時間が終って、みながいっせいに喋りをはじめる様を目のあたりにすると、その沈黙は、言葉の発見のために、会話の欲の再発見のためにあつたのではないかと思いたくなるほどののだ。

修道女の中には歌の上手な者がひとりいて、最後のシーンでは、彼女が横向きに床に端座している。その口からハミングでもれてくるのが、オフフェンバックの『麗しのエレヌ』のテーマだと気づいた時、私は虚を突かれる思いがした。この時代、シャンゼリゼのモーツァルトと称されたオフフェンバックの喜歌劇は、全ヨーロッパを席巻していたと言っても過言ではない。カヴァリエ監督は、享楽の世界が遠くにあることを示すためにこのメロディを口ずさませただろうか。それとも、この禁欲の世界にも、生きる欲びが脈打っていることをほめかすために？

ともあれ、私の耳には、黒衣の女性がひと節ひと節味わうように口ずさむその静かな調べが、ほとんど讃美歌のように聞えたのだ。



左より父役のジャン・ベルグ、オーロール・ブリー、そしてカトリーヌ・ムーシユ。



カルメル会は厳格な戒律と瞑想の生活で知られる。

そうなのだ、テレーズのこの世における在り方、短いからこそ一層あざやかに浮び上ってくる「分」の心得かた、それが実に美しく、潔く、見事なのである。それがこの場面に集約的に表されているのだ。

彼女の手が、たった一本のチビた鉛筆を貧しげな筆箱にしまう時、私たちは、何かがひっそりと完結し、満たされた瞬間に立ち合う。

声高にはなく、それをこれまた淡々と語るのが映像だ。アメリカの雑誌ニューズウィークは、『テレーズ』の映像を『アーヴィング・ペンの写真を見るようだ』と評したそうだが、まさに言い得て妙。ペンのスタジオ写真を思い浮べてほしい。対象である人間の、存在そのものには感動しているに違いないのだが、それをことさら声張り上げて称賛しようとはしない平準な視点。

ベンに共通するこの平準な視点を、監督（アラン・カヴァリエ）とカメラ（フ



静かで禁欲的な映像、撮影は『ディーバ』のフリップ・ルーセロ（86年、仏）。